立命館大学稲盛経営哲学研究センター 教育実践研究誌

ISSN2432-9800

RITA

利他の心で

教育を変える

仕事がおもしろくなる

vol.
12

学校を社会に開く

利他のDNAを
世界へ、
そして未来へ

リタラボ
RITA LABO

RITSUMEIKAN

RITA × EDUCATION

学力・共同性はトップクラス。でも、学習意欲は世界で下位の日本の学校教育を変える。

鈴木 寛氏（東京大学政策大学院／慶應義塾大学政策・メディア研究科教授）

――文部科学省の補佐官で教育政策を長年担当されていました。日本の学校教育の現状をどう見られていますか。

鈴木　2000年代にOECD（経済協力開発機構）による学習到達度調査で順位を大きく下げて、経済界などから「ゆとり教育による学力低下」と批判されました。しかし、2012年には日本の15歳の科学的リテラシーは1位（34ヶ国中）、数学的リテラシー2位、読解力1位と世界トップクラスの地位に回復しています。2018年でも読解力は書く力が落ちて少し下がったものの、科学・数学は依然トップクラスです。トップを競う中国との大きな違いは、日本の「共同的問題解決能力」が1位であることで、中国がOECDの平均以下であるのと対照的です。

　回復の要因を見ると、学習指導要領の見直しだけでなく、教員が朝の読書活動やアクティブラーニングなど授業の工夫をしたことと、コミュニティスクールという位置づけで地域の学習ボランティアが放課後の個別学習指導を行うなど、学校のステークホルダーと連携したことなどがあります。まさに学校教育の現場で「共同的な問題解決」を示したと言えます。

　しかし、ここに一つ大きな課題があります。日本の子どもたちの学習意欲がOECD加盟国で下位だということです。日本の教育は明治以来、教壇からワンウェイで効率的に教え、それを子どもたちが正確に理解し、ペーパーテストで速く多く正解を書くというものでした。そのため教室での一斉授業を秩序よく聞き、その正解通りに答えるという能力は、多くの労働者がマニュアル通りに働かねばならない工業社会では必須でした。

　けれども、近年産業構造が大きく変わり、そのような労働はロボットやAIによって代替され、なくなろうとしています。オックスフォード大学のオズボーン准教授は日本やアメリカでは、2040年までに現在の50%近い就労者の仕事がAIやロボットに代替され、なくなるという予測をしています。

　そのような中で、人間の仕事として重要になってくるのは、企業では顧客の深いニーズを探り、イノベー

プロフィール

東京大学法学部卒業。通商産業省、慶應義塾大学助教授を経て参議院議員（12年間）。文部科学副大臣（2期）、文部科学大臣補佐官（4期）などを歴任。教育、医療、スポーツ、文化、科学技術イノベーションに関する政策づくりや各種プロデュースを中心に活動。現在、大阪大学招聘教授、千葉大学医学部客員教授、神奈川県参与、OECD教育スキル局教育2030プロジェクト役員、World Economic Forum Global Future Council member, Asia Society Global Education Center Advisor, Teach for All Global board member、日本サッカー協会理事、ユニバーサル未来推進協議会会長なども務める。

ションによりそれに応える商品開発や販売手法を創造すること。また、地球環境問題や経済格差などのグローバルな重要課題に取り組み解決することや、ものごとを深く考え、生き方や社会のあり方のよりよき方向を見出すことなどです。

これらはあらかじめ正解があるのではなく、人間が自らの探究力やプロジェクト遂行力によって、解を見出していくものです。その基本となるのは、仕事や学びへ主体的に関わろうとする強い意欲であり、だからこそ日本の子どもたちの学習意欲が低いことは大きな問題なのです。子どもたちに自己肯定感がないというのも、主体的な学習意欲がない「やらされている勉強」だからでしょう。

――学習意欲が低いという課題に対して、学校のカリキュラムや授業はどのように変わればいいのでしょうか。

鈴木　2018年に策定され、高校では2022年から始まる新しい学習指導要領では、「主体的・対話的な深い学び」を掲げ、アクティブラーニングのスタイルで探究的に学ぶ姿勢を広げ、子どもたちの主体的な学習意欲を育てようとしています。この学びは学校の中だけで完結するものではありません。地域の課題や地球環境の課題に大人たちが真剣に取り組んでいる姿をフィールドワークによって学び、そこでの働き方や課題解決の手法を学びとることを重視して、「社会に開かれた教育課程」という方針も掲げています。私は今後の学校での学びとして、プロジェクト学習と探究学習を積極的に取り入れていってほしいと思っています。

――このような教育改革に呼応する動きは大学や企業にもあるのでしょうか。

鈴木　慶応大学SFC（湘南藤沢キャンパス）では、一般のペーパーテストの入試で入ってくる学生が5割にまで下がり、プロジェクト学習などを体験したAO入試で入ってくる学生が約半数になっています。2022年の高校での新学習指導要領実施に合わせて、大学入試におけるAO入試の割合が増えて、国公立大でも3割くらいになると予想されています。そこでは一人ひとりの高校生が学んだプロジェクトや探究が合格判定の指標になります。

慶應SFCの私のゼミではまさにプロジェクト学習を行っており、NPOの創始者や起業家が多く出ています。たとえば、NPOではカタリバ、フローレンス。起業家ではヤフー、ユーグレナ、スマートニュース、気仙沼ニット、リタリコ、IT系企業のトップもいます。

今、企業ではSDGs（Sustainable Development Goals）が社会性のある共通価値観となり、世界中の国家・企業・NPOの共通言語となりつつあります。SDGsに謳われている17の分野での目標の実現という「共通価値観の創造（Creation Shared Value）」により、社会価値と経済価値の同時実現を目指そうとしているのです。

OECD諸国の若年世代は「ミレニアム世代」と呼ばれ、経済価値だけではなく社会価値を追求するようになってきています。国連やダボス会議で演説するスウェーデンの高校生・グレタさんに代表されるように、地球環境問題などの社会価値を追求する若者が増えています。企業でも若い人の仕事へのモチベーションアップが必要となってきており、SDGsにより企業価値を高めるとともに、人材登用を図る指標として普及していくでしょう。

――今、地球環境問題や世界的な経済格差、テロと戦争などグローバルレベルの重要な課題が数多くあり、国連や国際社会、教育のあり方が大きく変わりつつあるということですね。

鈴木　はい。2011年の東日本大震災の時に巨大な津波に襲われた釜石の小・中学校で、学校にいた生徒たちを全員救った「釜石の奇跡」がありました。事前の防災教育で津波を想定し、対応マニュアルを十分学んでいたのですが、その中で「マニュアルに頼るな」「どんな時にもミスを恐れずベストを尽くす」「指示を待たずに率先者になる」という教育がなされていました。その結果、一度は想定していた安全なところまで逃げた子どもたちが、さらに巨大な津波が来ると自分たちで考えて、もっと高いところへ逃げて助かったのです。

我が国は、20世紀の正解のあるマニュアル型の教育には成功しましたが、今後は釜石のように想定外を生き抜くことができる教育にシフトしていかなければならないと思っています。

――今、新型コロナウィルスの流行によってパンデミック状態になりつつありますが、このような未曾有の危機に直面すると、社会と対話して自分たちで考え行動できる教育が必要と感じます。今日はありがとうございました。

北海道札幌市｜市立札幌大通高等学校

ミツバチプロジェクト始動！生徒が養蜂したミツバチが地域や社会とつながる〝パスポート〟に。

定時制高校が取り組むユニークなプロジェクト学習。

午前・午後・夜間の三部定時制で、単位制の市立札幌大通高等学校は、平成20年（２００８年）の開校当初から「社会に開かれた教育課程」をコンセプトに掲げています。キャリア教育、ＰＢＬ（Problem Based Learning、プロジェクト学習）、問題解決型授業などに取り組み、学校外の方々と連携する教育実践を数多く行ってきました。

平成24年（２０１２）からは、シティズンシップを育成する「ミツバチプロジェクト」に取り組んでいます。ミツバチの飼育から蜂蜜・菓子などの商品開発、札幌大通公園や東京銀座での販売まで、高校生が主体的に担う〝教科横断的なプロジェクト学習〟です。そこから誕生した「天然蜜食べ隊 初夏の百花蜜」は、最も美味しい蜂蜜を選ぶコンテスト「ハニー・オブ・ザ・イヤー」（平成30年）で最優秀賞に選ばれたほど本格的です。審査員から「花の香りが強く、香りも良い。非常になめらか」と評価されたこの蜂蜜は、札幌大通高校の巣箱から北海道大学の植物園まで飛んで行って原生林に自生する花々の蜜を採取しているから美味しいのです。

北海道の原生林の姿を残す北大の植物園。

札幌大通高校が作る「天然蜜食べ隊 初夏の百花蜜」。背景の森は約13haの北大植物園。

「ミツバチプロジェクト」が学校と社会をつなぐ。

「ミツバチプロジェクト」には、授業や委員会や部活動として、または個人の立場で教員も生徒も柔軟に関わることができます。さらに、高校に隣接する生涯学習センターで学社融合講座が開かれ、市民の受講生も養蜂にボランティア参加することもあります。養蜂をはじめ、商品デザイン、販売場所の確保など、ミツバチが社会とつながるパスポートとなってきたのです。

プロジェクトの情報発信は生徒の運営するメディア局が担っています。蜂の飼育状況から関係者へのインタビュー、グルメコンテストの模様まで丁寧に取材し、ブログや地元FMで発信しています。その甲斐あって、このプロジェクトに興味を持って札幌大通高校を受験する中学生も増えてきたといいます。

巣箱も生徒たちが製作したもの。

校内での養蜂の様子。

生徒の感想

ミツバチプロジェクトに関わりたいと思ったきっかけは二つあります。一つ目は、先輩たちが忙しくも楽しそうに総合実践（商品開発・マーケティング・販売実習）の授業で活動している様子を見たり話を聞いたりして、私もチャレンジしたいと思いました。二つ目は、アルバイトなどの社会経験を全くしたことがなかったので、ものを販売したり接客をしたりしてみたかったからです。際に経験してみるとアルバイトなどでは経験できないような、自分たちで考えて行動しなければならないことがたくさんありました。

ミツバチから広がる学びの場。地元ホテルと連携。

プロジェクト4年目には、生徒が有志で参加する学修プログラムがいくつも生まれ、新たな連携も始まりました。ミツバチプロジェクトでのつながりが、次のつながりを呼んでいるのです。

札幌大通高校は地元資本のセンチュリーロイヤルホテルと「包括連携と協力に関する協定」を結びました。とあるプログラムでホテル支配人と知り合い、蜂蜜を試食してもらい同校のキャリア教育について話したところ、朝食ビュッフェに蜂蜜が採用されました。ホテルへの職場見学やインターンシップも受け入れてもらい、日常的な信頼の積み重ねにより協定締結へと発展しました。書道部の生徒が書いた作品がホテルの宴会パンフレットに採用されたり、ホテルのシェフから「高校生チャレンジグルメコンテスト」の出品料理へアドバイスを受けたり、商品や企画開発など互いに協力し合っています。

センチュリーロイヤルホテルのシェフと真剣に打ち合わせ。

立地環境に恵まれた札幌大通高校。

商品のデザインもネーミングも毎年生徒が考える。

100以上の出品の中から札幌大通高校の蜂蜜が最優秀賞に選ばれた。

道外進出、東京銀座でも販売！

平成28年（2018）には東京・銀座で開催された「はちみつフェスタ」に出店し、生徒2名が蜂蜜販売にチャレンジしました。これまで北海道内での販売では商品自体や学校について聞かれることがほとんどでしたが、東京では北海道や札幌についての質問が多かったと言います。「生徒にとっては、自分たちが暮らす地域について見つめ直すよい機会にもなったようです」とプロジェクトを担ってきた西野先生はふり返ります。

世界中の蜂蜜が集められた会場内を興味津々に歩き回った生徒たちは、「こんなパッケージの蜂蜜がありました！」「あそこのブースのレイアウトが参考になった」など、生徒自ら探究を深めたようです。2日間の出展期間中、生徒は教員の助けを借りずに販売をやり抜きました。4年生の生徒は、ミツバチプロジェクトに関わる講座をすべて受講していたため、環境・植物・調理・養蜂の基礎知識を身につけており、来場者から寄せられる蜂や蜂蜜などのあらゆる質問に対応することができていました。その姿は大変頼もしく、ミツバチプロジェクトの学びの可能性が凝縮されていました。

（参照：ミツバチプロジェクト実践報告書）

◎はちみつフェスタ
蜂蜜の資格「はちみつマイスター」を運営する一般社団法人日本はちみつマイスター協会主催。フェスタでは世界各地の蜂蜜100種が購入できる他、蜂蜜の様々な使い方が学べる。

銀座のはちみつフェスタで商品を詳しく丁寧に説明する生徒たち。

西野功泰先生の言葉

3月のある日、校舎内の巡視をしていると、ミツバチプロジェクトに関わる授業がいくつか行われていました。商業科の総合実践ではプレゼン大会に向けた練習が大詰めを迎えていました。プレゼンでは販売実習やコンテスト出場を通して学んだことが発表されます。この発表が新しい生徒たちの気持ちに火をつけ、次年度へとバトンが引き継がれています。

隣の養蜂場では、越冬のため屋内に大切に保管していた巣箱を取り出して、教員とボランティアの方々が蜂の生存確認をしているところでした。新聞記者とメディア局の生徒たちの姿もあります。

こうした風景が校内に今や定着した背景には、教科の枠を超えた授業実践、地域での課外活動、外部連携、そして生徒と教員の挑戦の積み重ねの成果だと実感しました。

進路指導担当・平野淳也先生の言葉

3部定時制の本校では、貧困や発達障害、引きこもりという問題を抱える子どもたちも多く、「この子たちへ何かできることはないか？」と思い、学校外の福祉系NPOと連携することを始めました。プロジェクトに取り組む生徒たちは西野先生が引っ張り、そこで悩んだ生徒やさまざまな課題を抱える子どもたちは私が担うというような分担をしています。

私は今、「校内居場所カフェ」に取り組んでいます。企業や福祉系NPOなど外部の人に日を定めて来てもらい、子どもたちと触れ合って、話し合う場を本校の玄関を入った広場的な場所で開催しています。

ここの子どもたちは学校でのコミュニケーションで挫折したという子が多いのですが、外部の大人たちと接触して楽になり、少しずつ心を開いて悩みを話し合えるようになります。福祉系NPOだけでなく企業も人が足りないので、大通り高校から就職してくれる子がいればありがたいという気持ちもあって協力してくれています。このような対話の中から生徒が社会で働くというイメージを育んだり、就職後もサポートしてくれる福祉系NPOと出会うことができるのです。

PBLを活かすための カリキュラム・マネジメント。

「ミツバチプロジェクト」などのPBLを、札幌大通高校ではどのようにカリキュラムに落とし込んでいるのでしょうか。

それまで札幌大通高校では、4年間で卒業できないケースや進路未定のまま卒業する生徒が多くいるといった定時制高校ならではの問題を抱えていました。主な原因は、対人関係やコミュニケーション、不登校などです。地域社会の中で、生徒たちがどのように自己理解し、キャリアプランを立て、自立した姿を未来に描けるようになるか。学校を巣立っていく生徒たちに学ばせたいことは何か。キャリア教育を軸に教育課程の再編が行われました。

そこで浮上したのが、PBLの活用です。札幌大通高校では100を超える科目の中から、生徒自身が興味関心に合わせて時間割を作成します。地域連携・教科横断型アクティブラーニングの一つである「ミツバチプロジェクト」は、既存の授業に「蜂蜜」や「ミツバチ」が教材として取り込まれ、カリキュラムが作られています。

こうしたキャリア探求型のPBLのカリキュラム・マネジメントは、合同会社アニマドーレと協働でつくられています。アニマドーレは、高校生チャレンジグルメコンテスト事務局を立ち上げ時に担っていました。メンバーには大学や民間企業、デザイナーなどさまざまな専門家が揃っており、大通高校の西野先生もメンバーの一人です。

同校のPBLのテーマは、生産者とカスタマーをつなぐ食農教育体験です。生徒たちは自分の興味に合わせてアニマドーレでの4つのコース（ファームイン、販売体験、商品開発体験、広報PR体験）から選択します。教材はどれも「本物」で、現場のプロフェッショナルから学ぶことができます。協働でのカリキュラム創造は、地域連携の新しいあり方になりました。

◎アニマドーレ
食育プログラムの専門家育成を行う。「アニマドーレ」（生産者と生活者をつなぎ、食の大切さを伝えるプロフェッショナル）の育成と食育プログラムの確立、北海道の一次産業の活性化を目的としている。

イベントを通して子どもたちへの食育も行う。

教科横断型「ミツバチプロジェクト」〜生産から広報まで〜

テーマ	教科	実践
1 生産	理科	動物の生態（ミツバチの観察・飼育・採蜜）
	芸術科	工芸（巣箱、継箱、巣枠などの道具作り）
2 商品開発	情報・商業科	総合実践（商品開発・マーケティング
	家庭科	フードデザイン（コンテストへの参加）
		発達と保育（園児への食育）
	PTA	蜂蜜を使ったお菓子作り研修会
3 加工	国語科	国語総合（商品名考案）
	外国語科	英語での商品パンフレット作成
	芸術科	書道（ラベルデザイン）
	美術部	ラベルデザイン
4 販売	情報・商業科	総合実践（販売実習）
5 広報	メディア局	校内外での取材・情報発信

食を通したプロジェクト学習で、学校を社会に開いていく。

取材・文／金井文宏（本誌）

北海道全域で予選を突破した高校10校が参加する「高校生チャレンジグルメコンテスト」。今年度で7回目を迎えたこのコンテストは、単に食味を競うのではなく、「キャリア探求学習」として位置付けられています。生徒が学校を出て地元で学び、生産者や加工者、料理人とともに工夫して、「わがまちグルメ」の開発に挑む。名産による地域活性を図るプロジェクト学習です。参加校には、メニューを工夫する探究的な取り組みや、本物のプロジェクトワークが求められます。コンテストを立ち上げ、全道に食のプロジェクト学習を拡大する仕組みを作った札幌大通高等学校の西野先生にコンテスト当日にお話を聞きました。

高校生チャレンジグルメ
コンテスト
実行委員会　事務局長
西野功泰先生
（札幌大通高等学校／商業科）

地域と高校生が喜びを分かち合うプロジェクト。

――活気あふれるチャレンジグルメコンテストですが、北海道の高校生がつくった料理をどのような基準で評価されていますか。

西野　専門家による審査は地域との連携、料理づくりの現場オペレーション、原価計算などの採算性、そして食味や見た目などの料理そのものへの評価で行っています。あとは出店している10校のブースに並んでいる料理を、一般参加者が食券を買って味わい、味や見栄え、生徒の頑張りなどで評価して投票する点数もあります。最終的に審査員と合わせた総合得点で評価します。

――まさに今から料理のコンテストが始まりますが、過去にはどのような料理が優勝しているのですか。

西野　昨年は、羅臼昆布で有名な知床半島の羅臼高校による昆布を使った料理が優勝しました。地元でニシンが大漁だったということで、脂がのったニシンと羅臼昆布の出汁で炊いたご飯を詰め込んだ「らうすコロッと飯」という料理でした。

　この高校は通算6回のコンテストで4回優勝しています。しかし、本コンテストの意義は順位を決めることにあるのではなく、予選を突破した10校にいろいろな賞を用意して、「受賞した」という成果を地元に持ち帰り、連携した地域の人々と一緒に喜びを分かち合ってもらうことにあります。高校生は地域で食に関わるプロたちとコラボして、チャレンジした成果を実感できるのです。地域の大人たちにとっては、次代を担う高校生をバックアップし一緒に地元の新たな名産を生み出すというや

2018年のコンテストでグランプリと商品企画賞をW受賞した
羅臼高校の「らうすコロッと飯」

り甲斐と面白さがあります。

――高校生にとっては、本気のプロジェクトにチャレンジすることで、実践的な深い学びが得られるのではないでしょうか。

西野　そうですね。商品企画賞をとった料理など、出品された料理から、本物の商品になるものも多くありますからね。

地域学習プロジェクトを全道に広げたい。

――この取り組みは、文科省の新しい指導要領にある「社会に開かれた教育課程」のコアカリキュラムになるようなものですね。西野先生の所属する札幌大通高校では、「ミツバチプロジェクト」など地域の人々と共に取り組む食のプロジェクト学習に積極的ですね。こうした取り組みを北海道全域に広めようとチャレンジグルメコンテストを始めたのはどのようなお考えからですか。

西野　札幌市以外の地方の高校が地域の人と何かプロジェクトに取り組もうとした時に、「予算がないからあきらめる」ということが多く、この地域格差をなくしたいと思いました。コンテストへの出場費用、交通宿泊費、料理制作の材料購入費などは、コンテストの事務局を担う「コープさっぽろ」をはじめ、北海道の企業が負担してくれています（合計500万円）。

高校生チャレンジグルメコンテスト。（HPより）

――食のプロジェクト学習を全道に広げていくために、コンテストというプラットフォームができたということですね。コンテストの立ち上げはどのように行ったのですか。

西野　最初に道立高校の教員になった時の採用同期の9人の教員に声かけをしました。彼らは離島の高校に赴任したり、予算がない高校で苦労するなど、地域連携の取り組みがまったくない高校にいましたが、費用が主催者持ちということもあり、コンテスト参加へと動いてくれました。また、道立高校の校長会でもPRをさせてもらい、校長から勧められて参加してくれた高校もあります。

　私は商業科の教諭だったので、食のビジネスにつながるプロジェクトなら参加できるという商業科の先生にも声をかけました。当時は商業高校の「生き残り策」が問われていましたが、そんな消極的な策ではなく、このプロジェクトでは学びの「出口」として本物の商品づくりを行う場があることを示したかったのです。

　高校がやる気を出してくれれば、各校の参加形態は料理クラブなどの「部活」でも、「総合的な学習」など「授業」の一環でもいいことにしました。札幌大通高校ではユネスコクラブである「遊語部」に所属する生徒がSDGsのワークとして取り組んだり、「ミツバチプロジェクト」の授業の一環として生徒が参加するなど、アメーバ的に取り組みのネットワークが広がっていきました。私は授業担当の立場で参加しています。

　今日、檀上で発表した生徒は、灘（兵庫県神戸市）の酒蔵会社「沢の鶴」と甘酒をつくるプロジェクトにも参加するリーダーですが、札幌市立の進学校から本校へ転校した生徒です。転校後も悩むことがあり、体調を崩して休学したりしていました。休学中に半年間、東京に行き、ホテルで住み込みのアルバイトをしました。そこで自分を認められるようになり、復学してコンテストに参画することになったのです。働きながら学ぶ生徒もいる定時制のよいところは、まさにこのような「社会に開かれた教育課程」。学校の外で成長した生徒を受け入れ、チャンスを与えられる場となれるところです。

――休学して働いて、また復学できるというのは定時制高校のよさです

ね。先生たちが、学外での成長も含めて、子どもたちの成長をずっと見守っているんだなと感動します。

西野　市立に移管されて食物調理科で有名になった北海道三笠高校など、プロジェクト学習に真剣に取り組む先進的な高校でも、生徒がプロジェクトの成果に高揚したまま大学や専門学校へ進み、失望・失速することがあります。高校での探究学習が大学などでの研究へとつながらないのです。「大学ではやることがない。チャレンジする場がない」という声を聴くことがありますが、私は「大学でも受け身で学ぶのではなく、自分で創り出していく学生になってほしい」と生徒を送り出せるような教育のあり方を考えています。

一次審査でのプレゼンテーションの様子。

各校が地元の名産を使った料理に挑む。

　本校の生徒は、中学校で不登校の経験のある生徒も多いのですが、大通高校に来て、居場所や活動する場を見つけて元気になることもあります。しかし、社会や大学へ行って再び何もできない状況に戻ってしまうのではなく、そこでもう一度チャレンジしようという生徒を生み出す学校にしたいと思っています。そういう意味で、今回の「さっぽろたまコロッケ」の企画も、担当の先生方は意思決定を生徒に任せ、自分たちのミーティングで企画を決めることに委ねました。そこへ至るまでには、教員側の声かけから彼らの方向性や意欲が出るように仕掛けています。生徒たちに「何かやりたい、チャレンジしたい」というきっかけをつくるのが、教員の仕事だと思っています。

――中学校ではうまくなじめなかった生徒たちが、大通高校に来て動きたくなるきっかけは何でしょうか。

西野　大通高校には「キャリア探究掲示板」というものがあります。「アニマドーレ」という農作業教育体験プログラムや、まちなかの職業体験、さまざまなボランティア活動、課外活動などのプロジェクトに生徒がエントリーするための掲示板です。これらの活動の場は期間限定の企業でのインターンシップではなく、普段の学校教育の中で「本物のワーク」にチャレンジするためのものです。

食のプラットフォームを築くために。

――現在のチャレンジグルメコンテストの運営はどうなっていますか？

西野　参加する学校の担い手となる先生方の顔は見えており、当初は道内の教員のプラットフォームで運営していました。7年目になって、イベントのブランド力が付いてきて、「コープさっぽろ」はじめ、教員以外の企業・団体が担い手として参画してくれるようになり、運営組織が強化されました。事務局も大通高校から地元企業へ、現在では「コープさっぽろ」へと移りました。参加する各校のそれぞれの地域でも、大通高校のように学校が〝ハブ〟となった地域の生産者・事業者たちとのつながりが生まれてきています。今ではコンテストを担当してきた先生が異動しても、地域の人々が新たな先生を交えて参加できるようになってきています。

――こうした北海道全域での取り組みを始められる前には、西野先生は大通高校でどのような教育を展開されていったのか教えてください。

西野　現在、教職大学院に通い、大通高校での教育実践を長期実践報告書にまとめていますが、3段階で展開されてきたと思います。大通高校内でのミツバチプロジェクトのよう

今年度のチャレンジグルメ大賞を受賞した、札幌大通高校による伝統野菜を使った「さっぽろたまコロッケ」。

に教科横断型のプロジェクト学習をつくり、生徒と教員のつながりを濃くした段階。次に「キャリア探究学習」として学校の外の地域（札幌都市圏）の大人や〝本物〟とつながりをつくっていった段階。そして全道に拡大していくプラットフォームとしてチャレンジグルメコンテストをつくり上げた段階。

大学院などで、道外の先生から「高校の教育活動にこんなに多くの学外の人が集まって協力してくれるのはなぜか？」と聞かれます。しかし、実はシンプルで、「商業科の授業どうしよう？」と考える中で生まれてきたものです。ハチミツをつくるところから消費者に届けるところまで「本物を作って売る」という商業科の授業のあり方にこだわることで、本物の食べ物やそれをつくって売る大人たちと出会えました。そうして対地域・対企業とのつながり方が見えてきて、地域との関係ができたのです。

生徒が運営・接客する販売ブース。SDGsでの位置づけが書かれた看板も。

社会に開かれた学校の学びとは何か？

――西野先生がこれから取り組みたいテーマや課題はどのようなものでしょうか。

西野　今探しているところですが、大通高校では札幌や世の中の課題に挑戦する子どもを増やしたいと考えています。道内の高校や地域に対しては、チャレンジグルメコンテストに参加してほしいし、高校の教員には農協、漁協、市役所などの人々とマッチングしたり、私も含めてお金に強くなる必要があります。こういうつながりが地方創生の一つの基盤になるし、社会をよくしていくと思っています。きっかけがあれば、学校も地域もガラッと変わっていくということを実感してきました。

最近『ニューヨーク公共図書館』という映画が各地で自主上映されていますが、図書館が人々のコミュニティ活動を生むきっかけとなったり、学生の就職活動の支援や、病気やホームレスになった時の一時避難場所になるような公共的な業務を担っています。同じように学校という公共的なプラットフォームが持つ可能性を追求したいと思います。

――「社会に開かれた教育課程」を超えた「社会に参画し社会を変えていく教育課程」のある学校ということですね。もう少し具体的に教えてほしいのですが、大通高校の授業の次の段階とはどのようなものでしょうか。

西野　ミツバチプロジェクトをより教科横断的な授業にしたいと考えています。例えば、数学ではハチの巣の「ハニカム構造」について学ぶ、国語では生徒に広報の表現力をつける教材を開発するなど、同僚の先生方が提案してくれています。また、大通高校も創立11年目を迎えて教員の入れ替わりが増えてきたので、校内でのネットワークづくりや場づくりなどのカリキュラムマネジメントを強化したいと考えています。

授業に対する考え方を共有化するため、「大通高校の学びとは何なのか？」というテーマで、2ヶ月に1回、全校の教員研修が行われています。私は今まで学校を社会に開くという手段を目的と勘違いしていたので、社会に開かれた高校の教育課程とは何かを考えていきたいと思います。

――西野先生が、福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職大学院に通う理由は何でしょうか。

西野　教職大学院で理論面を学んでおり、今までやってきた実践を理論によって補完し、自分の実践を客観的に言語かできるようにしたいと思っています。大学院の授業では『7つの習慣』『ビジョンとは？』などの本をピンポイントでまとめてくれて、それについて議論します。『コミュニティ・オブ・プラクティス』『学習する組織』など、経営や組織文化の本を読んだり、全国各地の先生方と出会う中でいろいろと刺激を受けています。

また、チャレンジグルメコンテストに出てくれた各高校の地元グルメ創造の試みも、モデルやパターンとして残していきたいと思っています。

利他の心と新教科「公共」をめぐる対話

座談会

参加者
片田 孫朝日　灘中学高校公民科教諭
西尾慧吾　イエール大学3回生（哲学専攻）
倉石 寛　立命館大学稲盛経営哲学研究センター　副センター長
金井文宏　同　客員教授

司会
松村 淳　同　客員助教

松村　本日は「利他の心」と高等学校の新必履修科目である「公共」について、座談会形式で議論を進めていければと思います。立命館大学稲盛経営哲学研究センターでは、2022年度から始まる文科省新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」に基づく高校公民科必修科目「公共」に対応し、「〝利他〟の意欲・態度を培い公共的な課題に向かう青年を育成する教育」の普及ができるのではないかと考えています。座談会に先立って西尾さんには、あらかじめ「公共」教科書の第一章のテーマである「倫理的主体」についてアイデアを膨らませて来てもらっています。

西尾　はい。公共を考える時に、最初のとっかかりは「人間とはどういう存在か」からでいいかなと思います。アリやハチの例を出しながら、人間として生きるとはどういうことか、人間の独自性を考えたり、概念を持っていたりすると考えます。それは個体ベース。そこから広げて、個体と個体がつながって社会をつくる。次に、最初につくった原初的な社会からそこを超えて文化と向き合う。最終的には社会と社会が交わり、相互作用していくことを考えます。そして、最後に考えさせたいのは自然の中で生きること。これで環境の問題であるとか、フォーカスすべきところは覆い尽くせるのかなと思います。

金井　今言われた社会的動物としての人間の独自性についてですが、アリやハチだけでなくもっと人間に近いチンパンジーなどを例として出した方がよくわかるのではありませんか？

西尾　それはアリストテレスが言っているからです。アリストテレスはチンパンジーを知りませんでした。アリやハチは生き残らないといけないという切実な事情で群れをつくっていますが、人間はそうではありません。アリやハチと比較するとコントラストがシャープになります。最初に群れと社会とは違うということをまず提示したいと思いました。

倉石　それで何をやるのかを知っておきたいと思います。人間とそれ以外の生物の違いは「どうやって生きるのか」と共に、自分自身で考えている／いないというのが一番ではないでしょうか。

西尾　人間は言葉を使い、それによって価値判断をすることができます。つまり、伝達以上の効果を持っています。言葉は相手の行為を引き出すことができるんです。

倉石　人間のつくる社会とは何かというのは面白いテーマですが、抽象的ですね。そこにどこから切り込んで生徒に何を考えさせるのかが見えてきません。

西尾　それは「アリの群れと人間の社会はどう違うのか？」ということです。

片田　動物においても自他は区別されるだろうけど、私たちが「敵／仲間」を意識する際は直情的なものによって世界を分割しています。しかし、人はりんごを概念として用いる事ができます。そして本能的な欲望に「待った」をかけて、世界を複雑に分節することが出来るのです。

「公共」の教材に何を用いるか。

片田　「公共」でこうした問を考えていく時、学校現場の教員には生徒に考えさせる材料が必要です。概念の説明をしても、それが自分で使えないなら意味がない。その言葉を生徒が新しく使って世界の見え方が変わることがないといけない。そうすると教材のテーマは「面白い！」「これは考えてみたい！」というものである必要があります。そういう教材なら議論する形で進めていけるはずです。

金井　例えば、「なぜ大学に行くかわからない」という素朴な問いから進めていくのはどうでしょうか。

片田　そうですね。みんなが参加して問いを発することに意味があると思います。その時に学びとして概念が獲得されるかどうかはあまり重要ではないのです。

西尾　公共のテーマは「より善い○○」というのが多い。だから、「善い○○」をつくろうというのが最初にあればいいのでは。アリの群れと社会の違いを述べた理由はそれなんです。既存の「善い社会」とは、効率が重視される社会ですよね。その中では、いい歯車になるのが善とされている。しかし、それはもともと本来人間が目指すべき「善さ」ではないことを冒頭でしっかりと呈示しておく必要があると思います。生産性や効率性云々という議論に反対するためにも。

片田　わかります。ただ、それをやるなら生徒がとっつきやすいものにする必要がありますね。抽象度が高すぎるものはできるだけ避けた方がいいでしょう。そうしないと概念の説明になってしまう。例えば「よい家族とはどんな家族？」あるいは「よい学校とは？」と尋ねていく。

　このように私たちが集団の中で使っている「善い」はさまざまなものがあるでしょう。個々人にとっても「善い」が違うでしょう。だから具体的にみんなが話をして「なるほど」と思うような形にしておかないといけません。人間は「善い」を巡って考えますが、それはその集団の機能によって変わります。集団によって期待されるものが違うのです。それを調整し、議論しながら、パブリックな場で違う価値観を持っている人間が共につくっていくような過程が自由な民主主義の特徴だし、「公共」で育てたい市民のありようではないでしょうか。つまり、実践をやりながら、生徒みんながなるほどと思うものを冒頭にもってくるのがいいと思います。

西尾　一般的に「善い」は人間にとって基本的に快の一種です。考えるというのは「善く生きる」ことでもあります。健康やお金のことよりも、魂を善くすることが大事だと考えたのはソクラテスです。アリストテレスも、ソクラテスもプラトンも「公共的」です。今は「公共的」なものだけでなくても、善さは肯定されています。善く生きることや、それにつながることを最初の導入に持ってきて、そこからいくつかのテーマを引っ張って次の展開に繋げる必要があると思います。

考えるべきテーマとは。

金井　「よい学校」をスタートにするのはいいと思います。しかし、「よい」は社会的正義とは限りません。世の中には利他的な人ばかりとは限らない。個人の欲望を増長していくのが「よい」とする利己的な人もいます。そういう場合、「善い」を中心に据えるとして、何をどのように議論すればいいと思いますか？

片田　例えば意見が違うときに、果たして人間がつくり出した秩序はどうなっていたのでしょうか？　近代以前は強い者が勝つ時代でした。しかし、ギリシャ時代において民会は暴力沙汰にはならなかったと言われています。だから、アーレントがそれを高く評価するのです。民会はみんなで話し合って議論する場です。つまりパブリックである。ということは、暴力で秩序をつくるわけではない。ある人がある行為に同意を求める時、議論して合意を形成する必要があるわけです。暴力を使わずにつくる秩序。警察や軍隊など制度の話をどこまでするか、ということもありますが。

金井　現代社会も社会契約により秩序がつくられていると認識することは重要です。

片田　現代だと議論で合意をつくるしかないわけです。その時、「そのルールは俺の社会契約ではない」と言い得るし、それを表現することは可能です。しかし、「俺はこの法律には従わない」というのは近代では当然認められません。私たちの社会には、法があって暴力を抑止できます。そして、揉め事があった場合に第三者が入る裁判所があります。つまり、私的制裁が禁止されています。例えば、生徒に考えさせるテーマとして、時効になった犯罪者に対して、私的制裁を加える話などはどうでしょう。身内を殺害されるなどした事件に対して、私たちは心情的にはコミットできます。しかし、私的制裁はなぜよくないのだろうか？　こういうことはテーマになるのではないでしょうか。あるいは、暴力はなぜ国家が管理し、独占的に運用されているのかなども考えられるはずです。

金井　暴力を排除して社会の合意をつくる、これが「公共」の起源ですね。

片田　「公共」のトピックを決めていく時、みんなで議論することから始めて、善を目指してきたこと、暴力や国家などは扱いやすいと思います。あるいは、経済の学習においても具体的な場面を設定して、分業と階級の格差といった高校生でも想像しやすいものにするのはどうでしょう。アルバイトの場面でもいいと思います。マクドナルドはグローバル企業ですが、それを題材に店長とアルバイトと世界資本、利益とお金の分配の仕方を考えるとか。

　あと、マクドナルドの株主やお金がどう落ちるのかといったリアルな場面を使う。生徒が面白いと思う題材で、市場の功罪を考えさせたいですね。経済の部分で面白いと思わせる部分と、自由や公共と絡めて展開するとよいのでは。みんなということを考えるなら、税金をどれくらいかけるか、職場の民主制や株主の発言や組合などの要素も考えていく必要がありそうです。

金井　「公共」では20近くのテーマを挙げています。指導要領に例示しているテーマに沿って、倫理的な判断の軸と社会的な判断の軸を考えるものです。強いものが勝つというのではない社会契約のあり方なども考えていきます。第二章では法、政治、経済など具体的な社会の場面で政治的主体などを考えていきます。

片田　国家と裁判所というものが必ずテーマにならなければいけないのでしょうか？　みんなで議論すれば面白い、では難しいですか？

西尾　みんながいいと思うからいい、というのは危ういですよ。「現代社会」の授業でアンケートを取ってみ

たら、奴隷制があった方がいいという意見も少なくなかったりしますから。

片田　私は面白い「異論」を持ってきて考えるのは興味深いと思います。「体罰も多少なら許されるのでは？」などですね。つまり、何が暴力とみなされるのかといった議論の材料があればいい。あと、国際社会は暴力を乗り越えられていないですよね。それを考えるのはどうでしょうか。

倉石　なるほど、なぜ暴力を国際社会の中で根絶できないのか？　それを体罰から考える。そんなテーマが20あればいいと思います。

民主主義を語るにあたって。

西尾　それから民主主義を最初に置かない方がいいと思います。善と民主主義とは一直線につながっていません。ヒトラーも民主的に選ばれたんです。みんなが決めたから善ではない。これはまったく別の問題です。「合意があるからいい」というのではまずい、と最初に言うべきではないでしょうか。

片田　しかし、自由な社会ではそれ以外の方法がないのも事実。言い得ることは「私のことをできるだけ勝手に決めないで！それは私が決める。」ということ。それが自由という概念の中心です。その時に私たちのことは私たちで決めるのは外せないのであれば、民主主義しかない。トランプ大統領を選んでうまくいかないなら、後で取り替えればいいのです。

倉石　民主主義は数の論理という側面があるけど、数の論理だけで決めるのはいいの？

西尾　「私たちのことは私たちで決める」というのであれば、それ相応の責任を負う必要があります。民主主義はマジョリティの暴力になる可能性が常にありますから。

片田　民主主義はみんなにとっての善さを追求します。それがルソーの一般意思です。多数決とは違います。それが近代社会の原理です。パブリック、公共というものはみんなで議論をして新しいものをつくっていくこと。その面白さを強調したい。システムそのものの話や、制度的な話よりも。

金井　「公共」の第一章では「カントとベンサム」の考え方の対比、そして第二章でも「起業」などといったテーマが指導要領では出てきます。ここでも新しいものをつくっていこうという議論はできますね。

片田　ただ、それをどのようにして生徒が食らいつくようにするのかが問題ですね。

倉石　どこらへんにポイントを置くのか。従来の公民の授業だと、論じ下ろすような感じになってしまいます。

片田　そこはうまく設定すればいいと思います。教科書的にはみんなで倫理的な「善い」を議論したあとに、現代社会の政治経済の課題がくるという構成でいいのですか？

金井　指導要領ではその順序で学ぶことになっています。

倉石　第1章は哲学カフェみたいになるかもしれないですね。中身はともかく、人間はより善い社会を目指してきました。その中身や試みについてはいろいろあります。正解かどうかは別ですが、より善い社会を人は目指してきた動物なんだと。「より善い」の中身はいろいろあるが、とにかく努力してきた。それを希求してきたのが人間だと伝えたい。

金井　わかります。ただ、それでも論じ下ろす感じになります。何よりもマインドセットができるかが大事でしょう。より善いとは何か？　それを問うのだと。生徒によっては「自分は1千万円の年収を稼ぎたい」という者もいるでしょう。それぞれにとっての「善い」を他者にきちんと説明して議論できるかどうかが重要です。

生徒に自己開示を促すには。

片田　うまい導入と構成を工夫すればいけると思います。ただ、生徒に自己開示させるのは難しい。特に自分のコンプレックスに触れさせるのは。

倉石　誰でも自分の存在や弱い部分に触れるのは難しいよね。

片田　ただ、自己開示はどういう雰囲気でやるのかにもよります。安心できるクラスの人間関係があればあり得る。もっとも実存に根ざした問い、「母親がどう」とかは面白い例がないとダメでしょう。「どうして嘘をつくのは善くないのか」と、聞いてくる生徒がいるんですが、その生徒は親との関係の中でむしろ嘘をつくほうが善いのではと思っているわけです。嘘をつくうが善い場合もある。なのに嘘は本当に善くないといえるのか？　良い嘘もあるのでは？　みんなも一緒に考える。それを議論するだけでも意味はあると思います。

金井　ただ、議論で終わるのはよくないと思います。次の段階として人間の進歩とか叡智とかを志向したいですね。

片田　導入で持ってきたいイメージは、言葉を使っていいものをつくろうというものです。つまり、こうありたいというロマンを持ちながら、よりいいことについて追求する人間に気づき、みんなで話し合うことの重要性を理解してもらう。材料的には学級の運営でも家族でもいいと思います。ただ、教科書なので、どこかでカントやベンサムの話をしなければならない。

カントとベンサムから何を学ぶか。

倉石　確かにそうなんですが、カントやベンサムを理念的に学ばなくても、知らず知らずのうちにカント的な考えに近づいていくというのがいいですね。

片田　ベンサムは当時のラディカルな思想家。庶民も含めてみんなが一人の人間だと言った。彼は当時の人間としては極めて珍しく、女性も同性愛者の権利も認めていたんです。

倉石　カントは個人の尊厳を大事にする。対してベン

サムは多数決を大事にする人ですね。

西尾　あと、カントは理性的な判断をするには「こうすべき」といいますね。実践理性が求めるのはこうだろうと。

片田　神無き社会にあっても理性的に人は一致するだろうと。それを理想とする。ヨーロッパの文脈はキリスト教とどう向き合うかでつくられています。カントとベンサムでは、「多数がよければいいのか？」を考えさせるのでいいのですね。

西尾　カントはそのもの自体が善であるものを最高善としました。一方、ミルはそれによって快楽が得られること以外に善はないだろうと説いた。ミルはベンサムが嫌いでした。ミルは「満足した豚よりも不安なソクラテスになれ」と言った。ミルはとても倫理的です。イギリスで産業革命が起こり始めて、貴族と対立します。貴族も分をわきまえろと。カントは倫理的で、ベンサムは快楽主義と一義的に言うのはよくない。

片田　民主主義は少数意見も尊重することが求められます。では多数決では少数意見はどうなるのか？　そして、少数意見も大事とはどういうことなのか？

西尾　そこだけでベンサムとカントを理解したことにはなりません。そこにミルを置くことで植民地主義がわかります。ランクの高い快楽を最大化するのがいいという理屈が植民地主義に使われるのです。アフリカ人の快楽よりもヨーロッパ人の快楽が上位になるという考えですね。

「公共」は哲学ではない。

倉石　とはいえ、ここで哲学史の講義をするわけではないですからね。

片田　そうなのです。多数決と個々人の尊重、自由と意思決定とを考えさせることによって、そこには対立があるということを、どういう方法で展開させるのがいいかという話ですね。

金井　その場合は「原発」など具体的な課題を設定して考えたいと思っています。

倉石　「原発」を題材にすれば、最大多数の最大幸福の議論になります。温暖化とかも。でも、それである地域の人が不幸になることはいいのかな？　それを考えさせるのはどうでしょう。

西尾　一つは「原発と福島」か「沖縄と基地」、もう一つはグローバルな話ではどうでしょう。

片田　わかりますが、僕がつくるならその題材は相当気を使いますね。人間には人権、善を積み上げてきた歴史があり、それを大事にしたい。それは多数決で決められるものではないことを自覚させる。こういう議論をする時は、自分がマイノリティであろうとマジョリティであろうと、みんなにとっての「善い」を追求するから難しいんです。

倉石　ここで言う「みんな」とはどこまで入るのでしょうか？

片田　その「みんな」を増やしてきたのが人類社会の歴史です。国連とか。多数決をする時の内容は、それがみんなにとって善いかどうかであって、決して多数派にとっての善いではないこと。それはきちんと確認する意味があると思います。例えば掃除を学級でするという時、解決の方法を上でみんなで決めてしまって、押し付けるのではなく、下に下ろして当事者が議論することができるからです。

倉石　上から下ろすのではないと理解した上で考えることが大事だね。

片田　権限を下に下ろしていって、そこで合意をつくっていく。「俺は掃除はしたくない」という人間がいたとして、掃除はしないが、その代わり汚くてもいいというのは可能なのか？　そういうことも考えられるようにするといいと思います。

倉石　しかし、そうした例は実際にないのでは？

片田　地域や学校によってテーマが異なります。自治とみんなのためというのがあれば、導入としてはいいのでは。毎回議論するなら、相当面白いものにする必要がある。それで20近くも準備するのは骨が折れるでしょうね。

「公共」と利他の心の接点。

松村　そろそろまとめの議論に入りたいと思いますが、みなさんから、今回の議論を総括するかたちで、西尾さんと片田さんに一言ずついただければと存じます。

西尾　最初の方でも言いましたが、「公共」の教科書を考える時に、まずは「人間とはどういうことか」くらいから始めて、次にアリやハチの例を出しながら、個体ベースの人間の独自性を考えるのがいいと思います。次に、そこから広げて、個体と個体がつながって社会と文化をつくるフェーズに入り、最終的には社会と社会が交わっていく、相互作用していくことを考えていくのがいいと思います。

片田　いろいろ言いましたが、大事なことは近代社会の特徴は近親性を超越した「みんな」を志向していくことです。「みんな」とは「なんぴと（何人）」であろうと、みんなだということです。そうした想像力をどのように涵養できるのかが、この教科書に課せられた使命ではないかと思います。あと、実際に授業をするなら、いろいろと工夫も必要だなというのが正直な感想です。

松村　みなさん、ありがとうございました。片田さんが言われたように、我々の社会は近親的な親密性を超えた「みんな」を、どこまで押し広げていけるかという試みであったと思います。他者に対する想像力が涵養されたなら、その先にあるものは、他者の利益を考えることだと思います。つまり、稲盛経営哲学が教えるところである「利他の心」そのものです。本教科書を貫く1本の軸は、やはり「利他の心」であるということを今一度確認しまして、本座談会を締めさせていただければと存じます。

Person
VOL.10

私の稲盛哲学

京セラ・KDDI・JALグループを哲学経営で率いてきた稲盛和夫氏。
このシリーズでは、社員の皆さんが稲盛哲学をどのように咀嚼し、
自分のものとしているのか、仕事での実践についてお話をお聞きします。
今回は、立命館大学稲盛経営哲学研究センターの倉石寛が
「利他の心」について学問的な考察をします。

マイ・フィロソフィ

利他の心
～人類の歩みが語る人の在り方～

立命館大学稲盛経営哲学研究センター　副センター長
倉石 寛

人間は利他的な生き物である。それは、「一人では生きられないから」といった、追い込まれての選択というより、意志を持って切り拓いてきた在り方に思う。稲盛さんは「利他」は宇宙の摂理だと言われる。利他は、何か人を超えた存在から与えられた観念というより、何十万年に及ぶ人類の生への努力を通じて、摂理がその姿を具現していったとも言える。

共食、ともに食べる楽しさ

食が人間に限らず生き物にとって最も大切なものであることは言うまでもない。人類は、その生まれた時から、ほかの類人猿には無い〝共食〟という生き方をしてきた。親子の場合は当たり前だが、大人になっても人間はサルなどと違って誰かと一緒に食べる。ニホンザルでは食事は強いものから口にする。食べ物は大切なだけ、それは争いのもとになり、サルは争いを避けるために強い順に食べ物を手にし、分散して一人でそれを食べるが、人類は共に食べる途、「分ちあい」を選び生きてきた。何故だろう。人類学は次のような人類の歩みを探り当てた。人間は他の動物と違い、生まれた子供が大人になるまで、格段に時間がかかる。初めに脳、そして身体と、大人に育つまでには15、16年、しかも多産なので、子を育てるには親だけでは難しく家族以外の助力が必要となる。ともに食べることを通じて家族以外の他者との関係を築く、食事は食べるだけでなくコミュニケーションの場であり、お互いの心を通わせて信頼関係を築いていく場だった。

なぜ、悲しい時、痛むのは頭でなく胸なのだろう

人は悲しみにある時、〝胸が痛む〟。心が痛んだりするのは脳の機能なのに、なぜ胸なのだろう。赤ん坊は胸に抱くと泣き止むのは、お母さんの胎内にいた時にお母さんの心臓の鼓動を聞いて安心するからだと言われる。母親と赤ちゃんは世界を共有しているのだ。頭脳は「あなたと私」だが、感情による心臓の拍動は胸で感じている。そして、母親以外の人に委ねるときは、母親が語りかけるかのような独特の音調で子守歌を歌ったと考えられる。この音調はほぼ世界共通で音楽の起源となっていった。アラスカのイヌイットは狩りに出ない時には一緒に歌を歌う。狩りの時の行動のリズムを忘れないために歌うと言う。ニュージーランドのラグビーチームが試合の前に歌い踊る〝ハカ〟は出陣の歌としてよく知られている。

では、いつも顔を合わせているわけではない人との交信はどうするのだろう。違う集団の人々との交信を可能にしたのが、言葉や詩とそれらが可能にした想像力だった。見えないもの、例えば自分が経験したことを他者に表現することが可能になっていった。言葉や詩による想像力は、遠い地に生きる人々と心を通わせる共感力を高め、ともに生きる世界を人類は拡大してきた。

人は、子供を育てていくために、人類は、そのはるかな旅の中で、〝共感力〟を高め、ともに生きるという在り方を選んだ。

ゴーギャンの問いに答えて「我々は遠くから来た、そして遠くまで行くのだ」

RITA LABO は、稲盛経営哲学研究センターの教育実践研究部門として、利他の心を軸に、教育の未来を切り拓きます。

利他ラボ RITA LABO　http://www.ritalabo.jp

お問い合わせ：contact@ritalabo.jp　facebook　rita labo 検索
発行：立命館大学 OIC総合研究機構 稲盛経営哲学研究センター RITA LABO（リタラボ）　大阪府茨木市岩倉町2-150　立命館大学 大阪いばらきキャンパス
編集人：金井文宏　制作：大迫力　取材：梶原千歳　デザイン：坂本佳子、齋藤直己　印刷：アート印刷株式会社　2020年3月31日発行